

## 八 もう一人の偉大な師

今年の夏の猛暑は、各地で最高気温の記録をぬりかえた。しかし、蝶の暮すここでは、去年も庭師が熱波に弱った松の剪定を見送ったほど。海辺に帰ってきてから四年、酷暑が続いているという蝶の言い分は偽りではない。今年は三十日近く雨が降らず、果菜園に水遣りをする苦勞もひとしおであった。熱に浮かされて前後を考えず、蝶はもう一つ労苦をしようこんだ。E・カッシーラー著『認識問題』の訳業がようやく完結し、残されていた第三巻が出るという広告に釣られたのである。この巻は、I・カントのあとの高名な哲学者たち、フィヒテ・ヘーゲル・ショーペンハウアーなどを論じるとある。かじってみたら得るところがあるだろう。そうして、いつそう暑い八月になった。

カッシーラーは、ドイツに生まれ二十世紀前半に活躍した哲学者である。著書『認識問題』で、古代からの哲学をたどって人間の認識について深く考察した。それぞれの哲学者の考えに寄りそって綿密に吟味し、その上で批判をするという労作である。おのずと哲学史を語る優れた書物になっている。

カントは、ニュートン力学などの自然科学の発展を理解し、時代が近代へ移行しようとするまさにその時、「批判」という方法を編み出し、画期的な認識論を提出して、哲学の基礎を整理した。人間の認識能力に限界があることを明らかにし、限度を超えて考えることをいましめた。ところが、カントに続くドイツの哲学者たちは、意欲的にカントを超えて哲学の領分を広げようとしたのである。その考え方を丁寧を追って、カッシーラーは、結局それらの人々が認識問題に関して限界を踏み越えてしまったことを示す。弁証法を発展させ、大きな構えの哲学体系を構成したG・ヘーゲルも例外ではないのである。すると、カントの仕事はたしかに近代哲学を画するほど偉大だったのだ。

『認識問題』の蜜を吸った蝶の関心がカントに向かう。勢い、長く宿題として残っていた『判断力批判』を読むことになった。九月になっても暑い日が続く。

この書でカントは、まず、人間の美をとらえる力、美学的判断力を哲学的に位置づけようとする。ケーニヒスベルクの老人のその議論が芸術をあと押しすることに、詩人ゲーテはいたく喜んだ。ゲーテは、それだけではなく、ドイツ人がカントに多くを負っているとも言う。詩人でない小さな蝶も、カントが人のもつ美学的判断力を見事にとり出すお手並みに感服させられた。その上、哲学的な議論のあいだに挟まれるさまざまな文章が、この

人が人間を深く識っていたことを教える。機智もにじみ出ている。

第二部でカントは、今から思えば議論の困難な問題を扱おうとする。目的論や超感性的な根本原因や神まで、考察の中で位置づけるのである。世界を『百科全書』によって説明しようとするような啓蒙主義の時代であったが、それらの問題が哲学の重要なテーマだったヨーロッパで、哲学者カントはそれらを論じる必要があった。有機的な存在である生物や人間を機械的な自然観で理解することが困難な時代だった。論述の中にほとんど進化論に聞こえる言い方が出るほどだけれど、それを今日のように実証的に説明することができなかつたのだから、目的論の出番があつたのである。そして、論理をつきつめる人は、超感性的な原因に一つのあり方を与える。ただし、明晰な頭脳の持ち主は、目的論を人間の実践的な意欲や自由にもとづく道徳に関係させて、統整のためのその原理を認識の原理と直交させて世界をとらえる。根本原因や神は前者の奥に置いて、人間の認識を超感性的な原因から切りはなす。今日から見ても、可能なかぎり根拠のある哲学の基礎を築こうとしたことがわかる。

結局、カントは人間の心意をすくいとろうとしたのだ。人間を大切にしてい、心が意欲を抱きまた世界を観照しようとする傾向を肯定し、道徳観や美学的判断に基礎づけを与えて、よく生きることをも勧めたのだ、と思う。

カントに対する尊敬をいよいよつのらせたわたしは、その人となりをもっと知りたいと思った。インターネットで伝記を探して昔の翻訳書を見つけたが、今年になって『カント先生の散歩』というエッセイが出版されていることを知った。著者は池内紀、雑誌で文章に触れて以前から気になっていた人だ。文句なくこちらを買った。

この本のおかげでカントの人物像がイメージになってきた。「わたしは哲学を教える者ではないのですよ……それはそもそも不可能です……ただ哲学しているだけのことです」という授業計画書の言葉が紹介されている。ここにも、ほかの個所にも、カントの限界を知っていてじつに端正な精神を示すエピソードが語られている。イギリス商人との親交など知らなかった多くのことが書かれている。「カント哲学は孤独な思索ではなく、活発な対話の精神から生まれた」という重要な指摘に出会った。中庸と見えるカントが、フランス革命が混乱へ向かうときにも原則的な支持をくずさなかったという話も、原理的に考えた人の面目を語っている。カントの生き方は、自身の哲学に根ざしているのだ。

晩年に書きためていた遺稿のタイトルが、揺れ動くとはいえ、「形而上学から物理学への移行」というようなものだったという。「経験哲学の最終的立場」へ踏み出すことをめざしていたと考えることができる。急速に近代へ移行する時代のただなかで、批判哲学はもう一皮脱皮しようとしたのかもしれない。

『カント先生の散歩』でカント像を形づくっているうちに、もう一つの証言を想い出した。W・ベンヤミンが、『ドイツの人々』の中で、貧しい牧師であった弟から兄カントへあてた手紙をとりあげて語っているところだ。同時代人の次の文が引用してある。

建物に足を踏み入れると、「穏やかな静寂が支配していた。……とどこどころ煤けて飾り気のない、まったく簡素な玄関の間を通り抜けて、左手にあるやや大きめの部屋に入る。その部屋は客間になっているが、華美のかけらもなかった。ソファがひとつ、麻布張りの椅子が数脚、いくらかの陶磁器を収めたガラス戸棚、銀貨と予備のお金を入れておく事務机、そのかたわらに寒暖計と張り出し棚……それが家具のすべてで、白い壁の一部を被っていた。そしてそこから、まったく簡素でみすぼらしいドアを通って、同じようにみすぼらしい無憂宮に至るのであるが、ドアをノックすると、中からへお入り！』という快活な声がして、部屋に招き入れられるのだった。

ドイツ人として愛惜の念の深いベンヤミンは、「疑いもなく、(弟の)手紙には真の人間性が漲っている」と認める。しかし、「批判」の後継者の一人である人は、カントの生きた啓蒙主義の時代の「人間性の条件と限界」も見のがさない。「つましい切りつめた生活

と真の人間性とのこの相互依存が、他の誰においてよりもカントにおいて、最も明確に姿を現し、(その)生活感情が、いかに深く民衆に根ざしているか」を指摘して、「人間性」というものが問題になるころでは、啓蒙主義の光が射し込んでいた、あの市民の部屋の狭さを忘れてはならない」と語る。わたしの中的カント像は彫琢された。

まだまだカントのまわりを舞いたいのが、蝶には持続力というものが無い。カントの書齋にルソーの肖像画が掲げてあったという。蝶が夢見る蛹室には、モンテーニュ像の写真のコピーが貼ってある。世を退いて思索したモンテーニュ・陶淵明・良寛を三師と仰いでいるからだ。カント先生は畏れおおいと思いきれ、これまで師に数えてこなかったけれども、引用した文章を見れば、無憂宮で思索した人が江海に住まう蝶の師だということは明らかだ。規則正しい散歩で逸話を残した人について、池内紀が「時間を超えた世界で自由に遊ぶには、毎日を時計の針の正確さで過ごすのが一番である」という名言を吐いているのも、そういう生活を真似したい蝶をあと押ししてくれる。ただし、カントは、世を退いても人嫌いではないと言っている。陶淵明の言う「拙」な性分で人づきあいがじょうずではないのだが、世を退いた三師もじつは人間を大切にする人だったのだから、カント先生を加えた四師を師と仰げばそれも改善されるだろう。

海辺のここには訪れるサロンと呼べるものがない。けれども、美学的判断力を楽しませるに十分な自然がある。蝶がそれを巡って暮らすことをカント先生は認めてくれるだろう。毎日唱えている言葉をおろそかにしないなら、心意を励ます師の勧めに従うことになるだろう。蝶は、この暮らしにならずに衰えを速めないようにと、夢の中の老人に忠告する。

十月、散歩を楽しめる過ごしやすい季節になった。

